

令和2年度

春号

研究だより

光学園（山口大学教育学部附属光小学校・中学校）

令和2年6月26日（金）

研究発表大会

参加費
無料



研究発表大会の内容

研究発表・公開授業・分科会・講演

講演講師

慶應義塾大学 教授 鹿毛雅治先生

研究テーマ

小中一貫教育への歩みを通して、深い学びの在り方を探る（3年次）
～問いで学びを紡ぐ～

※本研究発表大会は、教員免許状更新講習の対象となります。

1月の公開授業研究会では、多くの方に御参会をいただき、ありがとうございました。たくさんのお意見や御助言を基に、研究を進めることができました。研究だより春号では、そのときの様子をお伝えいたします。

この度の研究発表大会では、公開授業研究会での成果と課題を受けて、「問いで学びを紡ぐ」という研究副主題で公開授業を行います。多くの方の御参会をお待ちしております。

国語科



国語科では、各期で目指す子どもたち像を見直しながら、授業づくりと一貫カリキュラムの加筆・修正をしています。前期は言葉を学ぶ楽しさ、中期は言葉の動きのおもしろさ、後期は言葉のよさや意義を捉えられるようにすることが大切だと考えています。

「まいて しらせよう」

自律的な学びの中で、問いをつかみ、学びを紡ぐ子どもの姿を目指して研究を進めています。自律を促すための手立てとして、選択の場を設けることと、学習に対する快感の振り返りに着目しているところです。

小学校1年1組 国語科 住江めぐみ



最も効果的な使い方をしている写真は、どれかな？ 「～和の文化を受けつぐ～和菓子をさぐる(東京書籍5年)～」

単元の学習課題を「最も効果的な使い方をしている写真を決める」とし、その課題に対する自分の考えをピラミッドチャートで可視化する場を繰り返し設定した単元構成にしました。そうすることで、子どもたちは、筆者の意図に着目して写真同士を比較し、効果的と判断できる観点を捉えたり問い直したりしながら、文章に合った資料を選択するコツを見出していきました。

小学校5年1組 国語科 田中 章憲



「話題や方向を捉えて話し合おう(光村図書1年)」

国語科における深い学びとは、授業で学んだことを日常の言語活動で柔軟に生かせるようにする過程にあるとの考えを基に、単元を構成しました。技能の獲得を図る学習では、学んだことが日常生活で役立つと実感させることが、次の学習に向かう強いモチベーションとなると捉えています。

実感させるためには、日常生活で様々な言葉に触れる時に、学んだ技能を意識できる力を身に付けることが有効と考え、そのための学習活動を単元の終わりに仕組むことを目指しています。

中学校1年3組 国語科 吉田 充寿



「作られた『物語』を超えて(光村図書3年)」

筆者の特徴的な表現による意図や効果を考えるために、「物語」という表現に着目しました。「筆者はなぜ『物語』という表現を用いたのか」という問いをつかみ、その意図や効果を考えるために「本文中のほかの表現で言い換えることができるか」という視点から考えを広げていきました。本文に用いられる言葉がもつイメージが自身の中にあり、それを他者に伝えながら、筆者がこの特徴的な「物語」という表現を用いた価値を評価するような姿が見られました。よいか悪いかを批判するのではなく、読み手として受けたイメージから、書き手の思いや意図を評価できるように、特徴的な表現に目を向けさせ続けたいと考えています。

中学校3年3組 国語科 作花 麗美





算数科・数学科

算数科・数学科では、見方・考え方カリキュラムを基にして授業づくりを行いました。問いを連続させることにより、違和感なく深い学びにつながる問いをもつことができるとともに、一単位時間の授業のねらいが明確になってくるように感じました。しかし、子どもの思いや考えが、授業のねらいに向けて自然に進んでいくためには、より専門的な知識や考え方を基にした手立てが必要であることも見えてきました。今後も、既存のカリキュラムを更新しながら、問いの連続性を中心とした単元を構成する際、何を意識していく学びの多いものになるのかについて考えていきたいと思ひます。

「形をしらべよう ～三角形と四角形～」

単元の深い学びに向かう、「どうしたらうまく形づくりができるか」という問いをつかみ、直角三角形の構成要素である辺の長さに着目して正六角形を形づくり、さらに敷き詰めた模様を見て平面の広がりを感じる事ができました。しかし、子どもは色や平面の広がりとしての美しさは実感できましたが、規則性の美しさを感じる事ができませんでした。今後は、子どもの思いがねらいに迫ることができるような授業づくりを目指していきたいと思ひます。

小学校2年2組 算数科 山本 東建



「面積」

周りの長さが12cmになるようにドット図の点と点をつないで様々な形を見出し、その面積を調べました。次々に形を見付けることができる子どもがいる反面、なかなか見付けられない子どももいました。その際に「できた形に特徴があるのか」という問いが生まれ、その問いをつかんだ子どもは、図形内部の線や点の数に着目し、面積と内部の格子点の数の関係性に規則性を見出す事ができました。しかし、見出した内容が多岐にわたったため、簡潔な言葉でまとめきれなくなってしまいました。学習内容をより精選した効果的な単元構成をすることが課題だと考えています。

小学校4年2組 算数科 兼安陽一朗



「三角形・四角形」

「四角形の包摂関係を基に、帰納的に特殊な四角形になる条件を見出すことができる」ことをねらいとし、定義を基に、名称のある四角形の関係性をベン図でまとめる課題とベン図を基に名称のある四角形になる条件を考える課題を設定しました。単元を通して、包摂関係を重視した学習を仕組んできて、図形の定義の関係性については理解し、平行四辺形が長方形になってもよいことは捉えました。しかし、それぞれの性質の関係性については、感覚的な部分が多くあったように感じました。1つの性質の関係性を四角形すべての図形について考えるような学習計画の方が学びとして自然になるのではと感じ、単元構成の重要性が改めて見えてきました。

中学校2年3組 数学科 中村 哲哉



「峨嵋山の山頂からどこまで見えるか」

峨嵋山は、附属光中学校のすぐ側にある山です。タイトルの発問から子どもたちの思考がスタートしました。与えられた情報は「標高117m」のみ。三角形の相似を利用できないだろうか考えた子ども。三平方の定理を利用できないか考えた子ども。…しかし、うまくいかない。そして、見える範囲に「限界はあるのか?」とつぶやいた子ども。それに対して「地球はまるいから見える範囲に限界はある!」ということを見出した子ども。子どもたちの問いが一単位時間の授業の中でつながり、クラスの全員が深い学びへと向かっていきました。

中学校3年2組 数学科 竹坂 豊



社会科



社会科では、「社会的な見方・考え方を働かせ、よりよい未来の社会を築いていく子どもたち」を目指しています。そのため、小中社会科部・山口大学共同作成のカリキュラムを基に授業研究を行っています。

また、2年次の研究を踏まえ、子どもの学びや問いを一層大切に、「単元間」・「単元」・「本時」レベルの問いのつながりを生む構成と、問いを発見・追究・解決・発展できる学習活動と手立ての研究をしています。

この二本柱の質を高めることで、問題解決的な学習の一層の充実や主体的・対話的で深い学びの実現とともに、よりよい社会の在り方を探り、社会に参画していく子どもを育てていくことができると考えています。

「光市今昔物語～市の様子の移り変わり～」

深い学びの実現のために、「単元間」では、既習単元「市の様子」と共通の視点で追究しました。「単元」では、光市と全国の移り変わりを、子どもが必要に応じて比較・関連付けしやすくなるよう資料や学習展開を工夫しました。「本時」で子どもは、「戦後、光市の人口は激減したのに、東京五輪の頃までに増えたのはなぜだろう」という問いを抱き、年表や資料を基に追究しました。単元を通して、過去の光市を知り、本当の意味での、光市のよりよい姿を問い続けていきました。

小学校3年1組 社会科 才宮 大明



「北アメリカ州 カリブ海諸国は統合すべきか否か」

「単元」では、「カリブ海諸島の小ささに着目し統合すべきか否かについて話し合う活動を通して、世界中で見られる地域統合の課題、植民地支配の時代からの課題について捉えることができる」ことをねらいとし、「本時」では、統計資料を基に、カリブ海諸国の統合について話し合い考える課題を設定しました。「単元」を通して、アメリカ合衆国とカリブ諸国を始めとした周辺諸国の関係性、産業構造の課題については理解させることができましたが、カリブ海諸国は統合「すべきか、すべきではないか」という「意図」を問う発問にとどまったので、「できるか、できないか」という「可能性」を問う発問を組み合わせると、より質の高い、深い学びにつながる授業を展開できると感じました。

中学校1年2組 社会科 吉岡 友子

理科



理科では、「科学的に物事を捉え、根拠を基に発展的に思考することのできる子どもたち」を目指しています。そこで、各領域や教材の系統性を基に、小中を通して育てていきたい事象を捉える視点を明確化しています。そして、子どもがその視点を生かして事象を捉えられる問いをもち、単元の学習に合わせて考えを更新していける授業づくりを目指しています。そうすることで、子どもたちが学びのつながりを実感するとともに、根拠を基に自己の考えを発展させていくことができると考えるからです。本実践では、第3学年と第6学年において電気の単元を扱いました。その際、電気を粒としてイメージさせることで、回路に流れる電流の様子について、実験結果や見出したきまりを基に更新させていくことのできる子どもたちの姿を目指しました。

「“でんき”のふしぎ ～電気の通り道～」

電気の学習の前期にあたる本単元では、「豆電球が光る時に、電気の通り道の中はどのようになっているのだろうか」という問いに、子どもたちが向かうことができるよう単元を仕組みました。「でんきくん」として目に見えないエネルギーを可視化して、導線の中について話し合うことはできましたが、中期や後期への学びのつながりを見出すには、さらなる手立てやカリキュラム編成の必要性を感じました。

小学校3年2組 理科 赤星 冨



「電気のヒミツを探る！～電気の性質とその利用～」

電気の学習の中期にあたる本単元では、「どうして豆電球とLEDの明かりが点く時間には大きな違いがあるのだろうか」という問いに、子どもたちが向かう単元構成を目指しました。子どもたちが電流の大きさに着目し、問いを解決することはできましたが、電気の変換効率や電気の効率的な利用と、回路に流れる電流の様子を学ぶこととのつながりをもたせるために、さらなる工夫の必要性を感じました。

小学校6年1組 理科 宮崎 洸佑



音楽科



音楽科では、「自分や他者のよさを生かしながら、これまでの学習と関連付けて担当パートにアレンジを加え、共に一つの音楽をつくっていく喜びを味わう子どもたち」を目指しています。そのため、小学校低学年では、リズム伴奏アレンジ、小学校中学年では和音・低音のリズムアレンジ、小学校高学年・中学校1年では、旋律・副旋律づくり、中学校2・3年では、総合的なアレンジ力を高めるカリキュラムとなっています。また、音楽科における学習の推進力を「思いや意図」とし、題材全体の中で、その持続や更新をさせる手立てを研究しています。

「日本と世界の音楽に親しもう～『コンドルは飛んで行く』～」

アンデス地方の民族音楽「コンドルは飛んで行く」の合奏を、題材を貫く課題とし、一人一人が好きなパートを選んでグループをつくり、アレンジをしていきました。演奏を工夫しようとする思いや意図をもたせるため、本時では、「『コンドルは飛んで行く』を日本の雅楽風、トルコのメフテル風にしよう」という課題を与えました。子どもたちは、事前に学習した雅楽やメフテルの特徴と関連付けながら、速度やリズムなどを工夫して合奏することができました。

小学校6年2組 音楽科 門田 集二



「仲間とともに表情豊かに歌おう～『浜辺の歌』～」

本題材では日本の歌のよさや美しさを味わい、表現を工夫する活動を行いました。今回はこの楽曲の歌詞に着目し、それにふさわしい副旋律を創作する場を設定し、学級の仲間でグループをつくり、協力して創作を行いました。子どもには、伴奏に使用されている和音を提示しました。そして思いや意図をもたせるために、歌詞から広がるイメージを絵で表現させました。子どもは仲間と協力し、個性あふれる副旋律を創作することができました。

中学校2年1組 音楽科 金光 修一



図画工作科・美術科



図画工作科・美術科では、「形や色などと豊かに関わり、作りだす喜びを味わうことのできる子どもたち」を目指しています。そのために、活動や製作の過程でイメージを形や色などの造形的な視点で捉え直したり、より実生活に取り入れることのできるような題材を考えたりしながら、授業づくりに取り組んでいます。

また、子どもが一単位時間の授業の中でつかむ「本時レベルの問い」と、題材を通して膨らんでいく「題材レベルの問い」がつながるような手立ての研究を行っていくことで、より子どもの思いや願いを大切にしたい授業づくりにつながるのではないかと考えています。

「光わくわくコンサート」

教師作成の二つの楽器を基に、どちらの楽器がよりテーマに合うかについて交流させることで、「テーマに合った楽器にするためには、どのような飾り付けをすればよいのだろうか」という問いをつかみました。子どもたちは、それぞれのグループで設定したテーマを基に、形や色を考えながら飾り付けを行っていました。しかし、グループのテーマに合わせたり、楽器に装飾をしたりする必要感を十分にもたせられなかったことが課題に挙がりました。今後は、子どもの思いがつながるような題材構成の在り方について研究を進めます。

小学校2年1組 図画工作科 池内 達也



「伝統工芸～生活を彩る～」

前時に「伝統工芸とは何か？」を学ぶ中で、「山口県の伝統工芸品とは？」から萩焼の鑑賞を行い、全国の陶芸作品の特徴について学習をすることで陶器に対する興味は高まっていました。本時では、好きな皿を選ぶ課題で、「何をのせるかで変わる」といった反応が見られました。また、サンマに合う食器を選ぶ課題では「サンマをのせるならこんな食器が合う」というイメージを既にもっていました。3年生に生活の中の彩りを考えさせるには、発達段階に合わせた問いが必要だという課題が残りました。

中学校3年3組 美術科 曾根 唯之



■ 技術・家庭科



技術・家庭科では、「よりよい生活を創造していく子どもたち」を目指しています。問題解決に向けて試行錯誤をしながら、自分や自分の家族、地域にとってのよりよい生活を見出し、子どもが実践していく授業を行いたいと考えます。そのためには、自分事として切実な問題をつかむことが必要です。観察・記録・インタビュー・試作等の実践的、体験的な活動や他者との比較を行うことで、自分にとっての当たり前だったことが本当に最適なのか問い直させたいと考えています。また、小5家庭科、中1技術分野でのガイダンスで、学び方〔問題解決のプロセス〕を学び、達成感を味わう経験をさせることで、子どもたち自身で問題解決ができるような授業計画を構想しています。

\\ 「私から地域へ ～共に生きる生活～」 \\

題材の深い学びに向かう、「地域生活をよりよくするために、生活音の出し方や防ぎ方をどのように工夫したらよいか」という問いをつかみ、感覚的な捉えと科学的な根拠の両面から工夫を探ることができました。しかし、子ども自身が題材のゴールや自分たちの学びの進み具合を十分捉えられていないと感じます。今後は、題材を通して「よりよい」とは何かを更新していくことができるよう、題材導入の仕組み方や、家庭における課題とのつなげ方を練っていきたいです。

小学校6年2組 家庭科 坂本真友香



\\ 「スタンドづくり ～生活をよりよく～」 \\

題材の深い学びに向かう、「どうすればよりよいスタンドが製作できるか」という問いをつかみ、接合の位置と角度を設定する活動に取り組みました。しかし、安全性や利便性を突き詰めて考えることができなかったと感じます。生活に関わっている状況を見つめ、「自分が望んで選んだ状況なのか」を考えさせるなどして問題を発見する力を育めるように授業の計画をつなげていきたいです。

中学校1年3組 技術科 瀬尾 優治



■ 体育科・保健体育科



体育科・保健体育科では、これまで、生涯にわたって運動に親しめるよう「運動との関わり方に着目して、運動の多様な楽しみ方を仲間とともに追究する子どもたち」を目指し、授業づくりに取り組んできました。今回は、多様な楽しみ方として、同じ年齢の集団ではなく、異年齢の集団と運動を行うことで、新たな運動の魅力をつかめることができるようにしたいと考えました。体格も体力も異なる小・中学生が、これらの差を踏まえて、共に「みんなが楽しく」という視点で、規則や動きを工夫していく中で、異年齢集団だからこそその運動の楽しさを味わうことができたと考えています。今後は、小中一貫をさらに意識して多様な集団での運動の在り方について考えていきたいと思います。

\\ 「ラグビーヒカリンピック！～ゴール型～」 \\

子どもが「みんながトライを決めるためには、どんな規則が必要か」という問いをつかみ、選択した規則がチームに合っているのか、客観的なデータから小・中学生で協働して考えることができました。それぞれが、規則に応じた動きをゲームで表そうと精一杯運動していました。技能差や小・中学生の思いの違いなどに課題が残ったので、これらの差を埋める手立てを考えていきたいです。

小学校4年1組 体育科 田中 歩



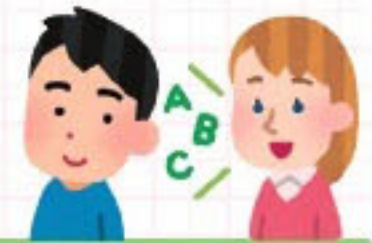
\\ 「ラグビーヒカリンピック！～ゴール型～」 \\

小学生が選択したルールやその理由を基に、個人の動きとチームの動きを考え実践し、小・中学生で試行錯誤しながら、より楽しむための工夫を考えていました。異年齢集団だからこそその考え方や動き方に気付くことができました。ただ、中学生にとって、これが他のゴール型にどのように生きるのか、同級生だとどのような戦術になるのか、比較・検討が必要だと感じました。今後も小・中学生が、より楽しむ運動の在り方を探っていきたいと思います。

中学校1年1組 保健体育科 高木菜満恵



外国語科



外国語科では、「どのような英語表現を使えば、自分の考えていることが相手に伝わるだろう」という問いが、どの単元にも共通するものであると考えています。各単元で学習する文法事項が、実際にどのようなシーンで使用できるかを子どもに気付かせるためには場面設定が重要であり、この設定が日常生活に自然と結びつくようなものにしていくことを大切にすべきであると再認識しています。

「自分の好きなもの・こと」

単元の深い学びに向かう、「どのような表現を使うことで、自分の考えを相手に伝えることができるか」という問いをつかむことで、key word を基に即興で自分の好きなこと・ものについて伝え合いました。その中で、完璧な英語でなくても、話し手も聞き手も理解できる英単語をヒントに反応し合うことで、即興での会話が続くことや、自分自身の英語表現を増やせることを理解し、自分の考えを英語で伝え、相手の英語を理解しようとする様子が見られました。

中学校2年2組 外国語科 梅田 彩味



道徳科



道徳科では、「問い」を「教材や他者等の関わりの中で、直感的及び論理的思考を経て、自らの生き方を踏まえて考えたいと感じた事柄」として、授業研究に取り組んでいます。作成しているカリキュラムを基に、小学校では、子どもが教材と出合った際の感想を、中学校では、教材から連想したことを大切に授業を仕組みました。参会者の方からは、子どもが生き生きと話し合う姿に、小中のつながりを感じられたという御意見を頂きました。今後もカリキュラムを基に、子どもが生き生きと自己または人間としての生き方について考えを深めたいような授業づくりや授業実践に取り組んでいきます。

「うつくしいところ」

ポイントとなる教材の場面を強調して提示し、教材を読んだ際に感じた不思議さを全体で共有させることによって、「なぜ、優しくしたことで、木のひしゃくが銀や金、ダイヤモンドになったのかな」という問いをつかみました。子どもは教材への見方を自分たちで変えながら、伸び伸びと話し合いました。しかし、終末までの問いのつながりについては課題が見られました。問い返しの言葉の選び方、振り返りの在り方などについて、より研究を深めていきたいと考えています。

小学校1年2組 道徳科 久保田高嶺



「自然への畏敬の念」

子どもが自らつかんだ「問い」を、道徳的諸価値の理解を基に、生命や自然、美しいもの、気高いもの、崇高なものとの関わりにおいて捉え、自分の在り方や生き方とは何か、人間としての在り方や生き方とは何かを考え、深めようとする姿が随所に見られました。今後も、「問い」の在り方、つながり、重なり等を研究していきます。また、道徳科における「学習内容」の一例を全内容項目別に整理し、「学習内容」のつくり方と共に紹介していきたいと考えています。

中学校3年1組 道徳科 藤永 啓吾



総合的な学習の時間



総合的な学習の時間では、「自分の可能性や未来の姿を模索し、生きる道を創り出していく子どもたち」を目指しています。自分にできることを考え、自分の人生や将来につなげ、自己の生き方を模索できる子どもたちを育てていくために、長い単元の中で、学習対象を何にするか、また、どう出合わせるかを大切にしています。本実践では、より自分事となって考えることのできる題材は何かを考え、防災を単元としました。しかし、自分事と同様に、学習対象に対する子どもの愛着の重要性も感じています。今後は、どのような学習対象にどのようにかわらせることが、子どもの問いをつないだり、持続させたりするために有効なのかを研究していきます。

「命を守るには？ ～自分たちができる防災～」

「災害から命を守るには？」という本単元における問いをつかみ、持続させるために、自分事として捉えさせることと、課題場面を設定することを大切にし、単元を構成しました。本時では、消防士の方からの情報や現地調査にて得た情報を基に、自分事として災害の状況を想定しながら、避難訓練の案を改善していきました。しかし、多様な意見を視点ごとにキーワード化し、話合いの目的を明確にする場面に課題が残りました。今後は、解決に向かうよりよい話合いの仕方を子どもとともに探っていきます。

小学校5年2組 総合的な学習の時間 大塚 進真



授業について語り合う会 in 光

令和2年8月7日(金)

授業づくり講座・講話

参加費
無料

講師 山口大学教育学部 講師 藤上真弓先生

- * 詳しい内容は、7月に各校に郵送いたします。また、本学園のWEBサイトにも掲載いたします。なお、本会も教員免許状講習の対象となります。
- * 本年度から、小中合同の講座を開設します。



問い合わせ先 〒743-0007 光市室積8丁目4番1号

小学校

TEL (0833) 78-0124・FAX (0833) 75-1507
URL <http://www.hikari-es.yamaguchi-u.ac.jp>

小学校



中学校

TEL (0833) 78-0007・FAX (0833) 75-1509
URL <http://www.hikari-jhs.yamaguchi-u.ac.jp>

中学校



小・中学校

URL <http://www.hikari-gakuen.edu.yamaguchi-u.ac.jp>